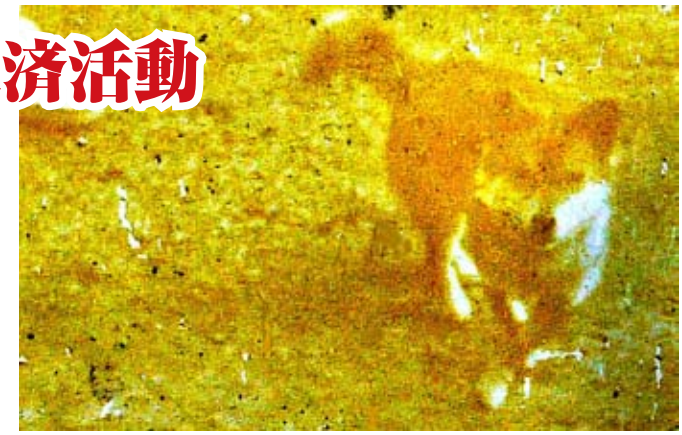
ひろば

Vol.120　2011.12.22. 発行
東京工芸大学同窓会
http://www.t-kougei.gr.jp
発行人：田沼　武能
〒164-8678
東京都中野区本町 2-9-5
TEL & FAX　03-5371-2710（事務局）

東日本大震災被災写真救済活動

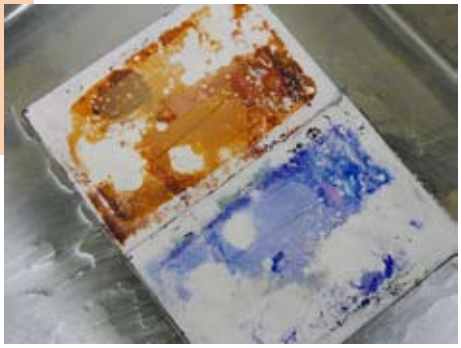
被災の激しいネガはすっかり画像が壊れている



イエロー層だけが残ったプリント、犬が駆けてくる

現場で説明をする立川さん

階上から来たアルバム



重なっていたプリントの裏側にシアン層が転写している

東京工芸大学の基礎は写真にあるという考えが頭にあり、各地で被災地での写真を救済するという行動が見え始めると、自分に何ができるのかが気になり始めた。カメラメーカーに勤めている早川さんが気仙沼から預かってきたプリントを受け取り、容器に海水と同等の塩分濃度の水を用意し、それにプリントを浸して様子を見ることにした。写真の変化が気になる。三日ほど経ってみても、殆ど変化はない。ちょっと気がゆるむ。そして一週間経ってみるとプリントの端の方からゼラチンが壊れ始めている。カラープリントの画像はシアン、マゼンタ、イエローの順に壊れてゆく。イエロー層だけが残っているプリントを見ると、かすかに見えるイエローの画像には子犬が嬉しそうに走ってきている様に見える。フォトショップで少し修正をしてみると犬の姿がはっきりと見えてきた。何枚かを同じようにしてみると楽しそうにしている人の表情がはっきりと写っていたりする。その時に写真の持っている意味、そして大切さを感じた。

５月になると長男が車にいっぱいの荷物を積んで、知り合いを訪ねて宮城方面に行った。そのために新しいデジカメも買った。息子の知り合いの父親は遠洋漁業の舟に乗っているそうで、被害は受けていないが港に入ることが難しく、すぐにまた、出港するということだった。

５月に私と立川さん、そして早川さんの３人で気仙沼へ行ったことは前号で報告をした。行ってみたことによって、更に気持ちが傾斜をしてゆく感じがする。

６月になると陸前高田市立博物館の資料救済の話が聞こえてきて、処理をする場所を探しているということだった。早稲田システム開発が主となり、東京都写真美術館や日本カメラ博物館、東京新聞、江戸博、武蔵野美術大学、庭園美術館な

東日本大震災被災写真救済活動

どのスタッフが集まり、活動を始めているということで、出来れば工芸大学にお願いができないかという話だった。この話を大学に相談し、何とかスペースの確保が可能だということになった。陸前高田市立博物館は職員の方６名が亡くなったり行方不明になっている。

社会的にも写真の存在が強く見られる状況が明確になってきている事が感じられ、こうなるとやはり写真で始まった学校である工芸大学としての動きが必要ではないかという気持ちになり、いっしょに気仙沼に行ったレイテックの立川さんと話し合い、大学での対応をお願いすることになった。

７月に入り、芸術学部長の内藤教授から話があり、仮称被災写真修復センター委員会が開かれ、東京工芸大学学生支援センターの活動として、学生及び卒業生のボランティアによる活動としての立ち上げが決まった。

大学の組織としての名称は被災写真処理センターとなり次のようなメンバーが決まった

実行委員長：内藤　明（芸術学部長）
実行副委員長：岸　剛史（写真学科助手）
コーディネーター：阪川武志（本学名誉教授）
畑　鐵彦（同上）
立川宏司（（有）レイテック代表）（42期）
大学事務所管：学務課

７月８日に第一回目のスタッフミーティングが行われ、その席で写真救済のための処理方法、処理薬品の取り扱い方、実施期日などが論議され、第一回目のボランティアを希望する学生を集めての説明会を７月23日に行う事となった。

学生説明会は新しく建築された１号館の教室で行われ、大勢の学生が参加してくれた。パワーポイントを使って被災現場の状況報告に併せて写真プリントの構造説明から始まり、被災写真の説明、それに対する処理そして安全を考えての作業方法などについての説明がされ。当日は参加希望学生のIDカードの作成まで行った。

第一回目の処理作業は28日（木）及び30日（土）に参加学生８名によって行われた。作業所は旧１号館の１階をメインの作業場とし、２階にはスタッフの集合場所としての部屋が用意された。この作業場所は私の記憶だと、以前カメラ毎日の編集長をされていた金沢秀憲先生の研究室のあったところであり、ロバート・キャパのの日本取材に随行をされた時の話などを聞いたことなどが想い出される。また、２階の部屋は私が写大への就職を目的とした面接を当時カラー研の教授であった奥沢先生から受けた部屋で、「少し歳をとっているのは却って良いかもしれない」と言われたことが想い出される（私は寄り道をしていたので３年余分に歳をとっていました）。

当日は午前10時に集合し作業場、処理の説明を行い数名のグループに分け、そのグループ毎に20枚程度の写真を渡し、処理をしてもらった。薬品による処理は阪川先生からアドバイスをもらい、消毒、殺菌剤としてクロラミンT、硬膜剤としてホルムアルデヒドの水溶液を使ってみることにした。何しろ初めてのことなので、正確な意味での薬品のテストを行う時間も無く、やりながら検討を加えてゆくという気持ちでのスタートだった。

最初に処理をする写真は５月に行った気仙沼の階上（はしかみ）中学校で写真処理の責任者をしている高井晋次さんに連絡をして送ってもらった。箱の中にはまだ本の形態を維持しているアルバムが入っていた。アルバムの各ページの写真は水浸のために殆どが溶け始めているので、丁寧に写真をページから剥がして、処理を行った。被災したプリントには腐敗などによる匂いが強く感じられる物もあったが、薬品の効果によって匂いはほとんど感じられなくなり処理が楽になった。処理済みの写真はアルバムの表紙と同梱にして、返

ボランティア学生への現場での説明

数名のグループになって処理を進める

水洗はカスケード式

送をすることにした。

この二日間で処理を行った数はアルバム17 冊と写真が787 枚だった。処理終了後返送の準備をして、最初のロットの処理が終了した。初めての作業であったが、すでに多くの写真が壊れてしまっている状況を見ると改めて気持ちが沈む様に感じた。アルバムのポケットに入っているうちは何とか画像が見えていてもアルバムのポケットからプリントを出そうとすると、既にゼラチンの架橋効果が無くなってしまっているために少し触れただけでも画像が壊れてしまう場合がある。何とかアルバムから出して硬膜液に浸しても、既に架橋効果を失っているゼラチンは殆どが元には戻らない。そのため何枚かはアルバムのポケットからは出さずにそのままの状態でラミネートをして返却の荷物に入れた。

気仙沼の階上地区の写真は既に終わりが見えてきているので、内藤委員長と岸副委員長などの数名が高井さん、あるいは富士フイルムからの情報をもとにして、仙台市の近くの名取市閖上（ゆりあげ）地区との関係を結び、更に写真救済の処理を継続することになった。

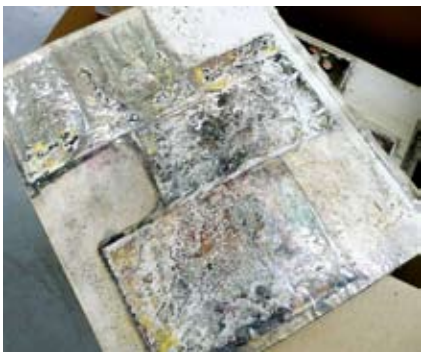
名取川に沿った閖上地区は仙台市の南に位置しており、長い海岸線が続いている所である。仙台空港は名取市と隣接する岩沼市に跨っている。この海岸線沿いには多くの被災をした町がある。閖上地区からの写真処理は８月20 日からスタートをした。夏期休暇中であったが処理をした日は７日間になり、参加してくれた学生は約30 名ほどに及んだ。閖上地区にはまだ多数の写真があり、第１便の荷物は２箱送られた、写真も被災程度が激しく、枚数も14000 枚を超えるという数だった。この時期になると気温も高くなり、ゼラチンの破壊状況もひどくなり、作業現場での気遣いもより厳しくなった。その状況を見ていると今後の事も気になり始め、時間との競争という気持ちが感じられてきた。そこで、このロットについては写真の救済率とも言うべき数字を知りたくなり、次のような方法で数字を出してみることにした。

画面の中に顔が見える、あるいは光景、風景、物など被写体の特定が出来る写真を救済対象とし、それ以外の写真については被災写真として分けて保存をすることにした。そして求められた数字は閖上地区から最初に来た２箱の枚数が14200 枚で、処理が可能で返却をするとした写真の枚数は約7400 枚となり、救済率は52.1% であった。

９月になって閖上から第二便が来た。アルバムを主体とした写真であるが、ほとんどの表紙が失われているので、階上の時のように表紙毎の分類による整理ができなかった。このロットの返済枚数は2200 枚だった。返送時期は10 月中旬から11 月に及んだ。

大学が学園祭の準備時期などになると学生の参加が難しくなるが、その時期には池田陽子先生やクリエイトの大木 博さんらが大変協力をしてくれた。

この時期になると画面の状況は次第にひどくなり、助かる写真の多くはポケットアルバムに収納された写真で、該当するポケットに水が及んでいない、又は何らかの条件によって水浸の状況がひどくはなかったと考えられる場合である。そんな中でちょっと驚いたのは古いモノクローム写真でまだ元気に画像が残っている場合があった



すっかり画像が壊れているプリント

乾燥機の入り口のローラーは外してある

乾燥機では完全に乾かないので、つるして乾かす

モノクロームプリントの中には元気な物もあった

ことである。

この度の様に写真が水に浸ることによって被災することはそうそうあるわけではなく、従って、画像保存の考えにおいても、この様な自然災害による画像の破損についての研究はあまり行われていないと考えられる。私がこの写真の救済処理をしている間に巡り会ったのは2010年の日本写真学会誌に鈴木隆史氏が技術レポートとして書かれている「水害を受けた写真の救済と保存処理法」であった。今後この様なテーマについての研究資料が増えてゆくのではないかと期待をしたいと思う。

先に書いた、本来は弱いはずの古いモノクローム写真が残っていたということを思うと私の知識や経験不足が悔やまれる。また、今の時代のことで思ったのはデジタルプリントのことである。この度の写真の中にはある程度の数のデジタルプリントが含まれていた。それらは多少の被害は受けてはいたがゼラチンが壊れてしまったように完全に画像が失われていた物は無かった。中でも多分顔料インクによると考えられる画像は多くが元気に残っていた。やはりゼラチンの存在が多くの画像破損の原因となってるわけである。ゼラチンという存在を考えると正に写真の基礎を築いてきた貴重な存在である。私が学生の頃はPVAなどが使えないのか、等と考え乳剤製作に使ってみたこともあった。こうして思うのは写真の世界における不思議な能力を持ったゼラチンの存在である。そこに写真としての能力がまだ重宝されている。その点については何か嬉しいような気持ちも感じると同時にインクジェットプリントの強さを見たことに時代の変遷を感じたとも言える。

今後の行動として考えられることは返却のための方法をどのようにするのかである。地方によって異なる返却方法を調べ、それらの中から最も良いと思われる方法を選択し、改良を加え実行に移す事が考えられる。

最後に今回の写真救済の処理に参加協力をしてくれた学生さん、そして卒業生の方々に強く感謝致します。

写真と記／畑　鐵彦（41期）

新校舎第Ⅱ期工事新２号館

旧２号館、５号館、スタジオ棟他を解体して行われている第Ⅱ期工事も、24年８月竣工予定で、着々と工事が進んでおります。

第2回　ホームカミングデー

平成23年9月17日、中野キャンパスで第2回「ホームカミングデー」が開催された。

カミングデーは大学の近況に触れ、当時の学友や恩師との再会・交流・親睦を深めるため大学が卒業生を招待するというイベントである。

卒業25周年、50周年にあたる卒業生には日頃からの社会貢献により大学の名誉を高めていただいていることに謝意を表し、大学から学友記と記念品が贈られた。

式典の前には、新1号館の校舎・設備を見る学内見学が行われ、式典後は、会場を新3号館に移して懇親会が行われました。

ホームカミングデー

懇親会会場ではマンガ学科学生数名による、似顔絵コーナーが設けられ盛況でした。

式典受付で貰った番号札により、抽選が行われ、若尾学長デザインの腕時計（非売品）やデジタルカメラなど豪華賞品が贈られました。

写真と記／糸賀成永（56 期）、福村　敏（45 期）

ホームカミングデーの日、新３号館で撮影

写真　中村正彌（34 期）

カフェスペースと新宿ビル群

５Ｆ植樹スペースには、樹木の間に南瓜が実っていた。

３Ｆのグリーンコート

九州支部

東京工芸大学同窓会九州支部発会式　平成23年11月1日　於：熊本ホテルキャッスル

去る平成23年11月1日（火）九州は熊本市において九州支部の発会式を行いました。開催場所は熊本城が眼の前に見えるホテル、熊本ホテルキャッスルにて大学側の三名の先生方をお招きして総勢40名の参加をいただき盛大におこなわれました。

約30年前までは九州の各県の温泉地で奥澤先生、関先生などお招きして開催していました。福岡県田川市の二村先輩がお世話せれておられましたが、亡くなられてから永い間同窓会は開かれていません。この度、新たに九州支部を立ち上げましたのでよろしくお願い申し上げます。

さて、今回は名誉教授の畑 鐵彦先生、同窓会理事長の川名晴美氏、事務局担当の花川正英先生の三氏の先生方に東京からお越しいただきました。

午後4時30分に開会。司会を43期生の原田邦博氏がおこない、支部長の小生の挨拶に始まり川名氏、花川氏のご挨拶をいただき、続いて“大学の現状”をスライドショーにて畑先生からご説明をいただきました。立派になっていく大学の現状に皆さん感心していました。

その後、参加者全員の記念撮影をして、懇親会を6時から28期生の大先輩にあたります三代剛克氏、岸田幸博氏のお二人の乾杯で始まりました。28期生から65期生の若い方々の参加でパーティも大変に盛大の内におこなわれ、33期生の永井宗男氏の三本締めにて次回の再会を祈念して、楽しい懇親会を終了することができました。また、今回の記録はスナップ写真では45期生の中島光司氏が担当しました。

東京工芸大学同窓会九州支部
支部長　堤　　隆志（34期）
幹　事　中島　光司（45期）

堤　隆志　氏

同窓会理事長
川名　晴美　氏

同窓会専務理事
花川　正英　氏

畑　鐵彦名誉教授

司　会
原田　邦彦　氏

締めの三本締め
永井　宗男　氏

乾杯の音頭
三代剛克氏、岸田幸博氏

新潟支部

東京工芸大学同窓会新潟県支部第42 回総会　平成23 年８月31 日　於：チサンホテル＆コンファレンスセンター新潟

今年の新潟県支部総会は昨年に引き続き新潟市で開催しました。

総会は支部長挨拶、会務報告、会計収支、監査報告があり、その後同窓会副会長の奥田先生から受験の時の出来事、昔の修業時代の体験、写真撮影の心がけなど貴重なお話しをお聞きする事が出来ました。そして同窓会理事長の川名さんからは現在の学校の様子、同窓会の現状などのお話しがあり、その後懇親会に入りました。今回は新潟市と言う事で参加者が例年より多く、先生方を入れて１９名でした。

懇親会は専務理事の花川先生による乾杯の後、参加者より一言、いろんな思いのスピーチをして頂き、和やかなうちにお開きとなりました。来年の総会は長岡で予定しています。

新潟県支部長　小林　俊郎（第 44 期）

フォックスタルボット賞

2011 フォックス・タルボット賞は１０月１２日に審査が行われ下記の方々が受賞しました。

第　一　席	田村　　翔	彼女に魅せられて	芸術学部・写真学科３年
第　二　席	小椋　夏子	心のまなざし	芸術学部・写真学科２年
第　三　席	鈴木　貞一	東京工芸大学ツアー２０１X	芸術学部・写真学科１年
佳　　作	前田　梨花	INVINCIBLE FIGHTER	芸術学部・写真学科３年
佳　　作	孟　　憶南	DISTANCE-time in Tokyo	芸術学研究科２年
佳　　作	渡邊　竜輔	決定的瞬間	芸術学部・写真学科１年
佳　　作	上木　健裕	郷	芸術学研究科２００７年修了
佳　　作	申　　喜琇	人間№２	芸術学部・写真学科研究生
モノクロ賞	長谷川　唯	ふりむくな、ふりむくな、	芸術学部・写真学科３年

フォックス・タルボット賞は、写真表現に情熱を傾ける若い作家の登竜門としての役割の他、国際的視野をもった写真家の育成を促進する目的により、1979 年東京工芸大学短期大学部に設けられ、今回で第32回を迎えることになりました。

本賞は、ネガ・ポジ・プロセスの発明者で近代写真術の父、ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット氏（英・William Henry Fox Talbot 1800 ～ 1877）の偉業をたたえ、イギリスのフォックス・タルボット美術館のご協力を頂き、氏の名前を冠した賞となっております。

本年度のフォックス・タルボット賞の応募者は 67 名、作品数 119 点でした。

第一席の田村翔君は一年生の時からスポーツ写真で作品を作っており今回はテニスプレーヤーのちょっとした瞬間を捉えた作品です。第二席の小椋夏子さんは屋外で創作活動を続ける画家志望の青年のドキュメンタリーです。第三席の鈴木貞一君はパロディー作品で学長他数人の教員も登場します。なお今回は留学生が二人入選を果たしました。外国人が見た日本の現在を記録しています。前田梨花さん、渡邊竜輔君はスポーツを、長谷川君は昨年度の延長戦にある日常のスナップです。卒業生の上木健裕君は震災の東北で現地の人を対象に気丈に生きる人々を取材した作品です。

若尾学長から賞状を授与

作品の前で、田村　翔君

第　一　席
彼女に魅せられて
田村　　翔
（芸術学部・写真学科３年）

第　二　席
心のまなざし
小椋　夏子
（芸術学部・写真学科２年）

第　三　席
東京工芸大学ツアー
201 ×
鈴木　貞一
（芸術学部・写真学科１年）

ひろばのページ

写大三六会

写大三六会　東京青山“梅の花”　2011.09.17

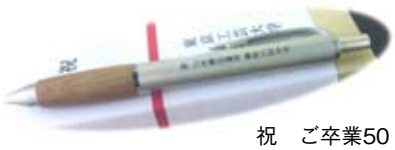
涼しくなった秋、10 月を迎えました。今年は東日本大地震をはじめとして、いろいろな災害があった年でした。もうこれ以上の災害はいらないと誰もが思っています。

我々は卒業 50 周年のクラス会を 3 月 25 日に準備していましたが、3 月 11 日の東日本大震災で延期となり、そのままになっていた時に「ひろば」の案内でホームカミングデーを知りました。そこで写大三六会（さぶろくかい）を決めホームカミングデーの参加も呼びかけました。

学校には 18 名が参加し、17 時からの宴会には 26 名が集まりました。

我々は昭和 35 年度の卒業で、学友記と記念品を戴きました。

記／速水　諄一（36 期）



祝　ご卒業50 周年　記念品

36 期工業科

横浜散策、山下公園にて　2011.09.16

ホームカミングデー懇親会場にて　2011.09.17

卒業から 50 年、第 2 回ホームカミングデーに合わせ、36 期工業科のクラス会を 1 泊 2 日の日程で開催しました。

9 月 16 日午前 11 時、横浜桜木町駅前広場に集合、東日本大震災の被災地東北から嬉しくも 2 名の参加を得、定刻には 20 名の懐かしい顔触れが揃いました。山下公園、港の見える丘公園など 5 キロの行程を散策、残暑にもめげず完歩しました。夕方から級友の譚氏経営の「酔楼」で宴会となり、先ず物故者 7 名のご冥福を祈り黙祷、その後近況報告、想い出話に花が咲き、和気藹々のひと時でした。

横浜 1 泊の後、翌 17 日中野校舎に移動、何十年ぶりの中野坂上では高層の建物を見上げ、ビル風に煽られながら母校に到着、学内見学では校舎・設備のあまりの変貌ぶりに驚き、続いて式典、懇親会に出席しました。次回幹事に石田・堤両氏を選出し 2 年後の再会を約束して散会となりました。楽しい 2 日間でした。

記／赤坂　吉朗（36 期）

久保田富弘 回顧写真展
**　一宰相列伝一　素顔の総理 16 人**
2012 年 1 月 5 日（木）～ 18 日（水）
10:00 ～ 18:00（最終日は 14:00 まで）
ボートレートギャラリー
東京都新宿区四谷 1-7　日本写真会館５階
前総理大臣官邸写真室長
久保田　富弘（27 期）

岩松翔太個展　フィルミ
2011 年 12 月 5 日（月）～ 10 日（土）
GalleryQ　東京都中央区銀座 1-14-12
岩松翔太（82 期）

廣瀬　睦　写真展
「鏡花水月」心に滲みる刻（とき）
2011 年 6 月 30 日(木)～ 7 月 6 日(水)
オリンパスギャラリー東京
2011 年 7 月 28 日(木)～ 8 月 3 日(水)
オリンパスギャラリー大阪
廣瀬　睦（47 期）

桜井 秀 写真展
「ノスタルジックな道」＝ルート 66 ＝
2011 年 11 月 11 日（金）～ 12 月 19 日（月）
10:00 ～ 17:30（日・祝休館、入場無料）
キヤノンギャラリー S
東京都港区港南 2-16-6　キヤノン S タワー 1 F
桜井　秀（34 期）

入試情報

東京工芸大学　平成 24 年度入試のご案内

■入試概要

◆募集学部・学科

芸術学部　写真学科／映像学科／デザイン学科（ビジュアルコミュニケーションコース・デジタルコミュニケーションコース・ヒューマンプロダクトコース）／インタラクティブメディア学科／アニメーション学科／ゲーム学科／マンガ学科

工学部　メディア画像学科／生命環境化学科／建築学科／コンピューター応用学科／電子機械学科

◆入試日程

学　部	入試種別			出願期間（必着）	試験日	合格発表日
芸術学部	一般入試	前期		1/5(木)～1/23(月)	1/29(日)	2/3(金)
		後期		2/20(月)～2/29(水)	3/5(月)	3/9(金)
	センター試験利用入試			1/5(木)～1/27(金)	本学による個別学力試験なし	2/8(水)
工学部	一般入試	Ⅰ期	A 方式	1/5(木)～1 /21(土)	1/26(木)	2/1(水)
			B 方式		1/27(金)	
		Ⅱ期		2/2(木)～2/17(金)	2/22(水)	2/27(月)
		Ⅲ期		2/20(月)～3/6(火)	3/9(金)	3/15(木)
	センター試験利用入試	Ⅰ期		1/5(木)～1 /13(金)	本学による個別学力試験なし	2/7(火)
		Ⅱ期		1/23(月)～2/15(水)		2/27(月)
		Ⅲ期		2/20(月)～3/8(木)		3/15(木)
	AO 入試	Ⅲ期		2/20(月)～3/5(月)	3/8(木)	3/15(木)

※選考方法など詳細は平成 24 年度学生募集要項でご確認ください。

■同窓生子女等入学優遇制度について

同窓生および在学生の関係者を対象に、入学金相当額を免除いたします。

◆入学対象学部等

芸術学部・芸術学研究科・工学部・工学研究科

◆対象範囲

同窓生の ①子供 ②孫 ③兄弟姉妹 ④兄弟姉妹の子供 ⑤父母 ⑥父母の兄弟姉妹 ⑦父母の兄弟姉妹の子供 ⑧配偶者 ⑨配偶者の兄弟姉妹 ⑩配偶者の兄弟姉妹の子供 ⑪配偶者の父母 ⑫配偶者の父母の兄弟姉妹 ⑬配偶者の父母の兄弟姉妹の子供

在学生の ①父母 ②兄弟姉妹 ③父母の兄弟姉妹 ④従兄弟

■願書請求・お問い合わせ

東京工芸大学入試センター　神奈川県厚木市飯山 1583

[フリーダイヤル] 0120-12-5246　[URL] http://www.t-kougei.ac.jp

東京工芸大学芸術学部卒業・大学院修了制作展 2012

「東京工芸大学芸術学部卒業・大学院修了制作展2012」を以下の概要にて開催します。メディアアート教育の集大成である卒業・修了制作作品を一堂に展示し、学内・外に広く公開することで、メディアアーティストとしてのデビューを支援する、大変見応えのある展覧会です。15回目を迎えた今回は、初めて秋葉原を会場として開催いたします。ぜひご来場ください。

■開催期間

平成24年2月17日(金)　14:00～20:00
2月18日(土)　10:00～20:00
2月19日(日)　10:00～16:00

■会場　※いずれの会場も、入場無料、事前予約不要です。

◎秋葉原UDX　（東京都千代田区外神田4-14-1）
JR「秋葉原」駅下車徒歩2分、地下鉄銀座線「末広町」駅下車徒歩3分、地下鉄日比谷線「秋葉原」駅下車徒歩4分、つくばエクスプレス「秋葉原」駅下車徒歩3分

◎ベルサール秋葉原　（東京都千代田区外神田3-12-8）
JR「秋葉原」駅下車徒歩4分、つくばエクスプレス「秋葉原」駅下車徒歩5分、地下鉄日比谷線「秋葉原」駅下車徒歩7分

訃　報　（敬称略）

土方俊三	（第1期・旧制・東京写真専門学校卒）
山田瑞穂	（第16期・写真理学科卒）
境　永次	（第17期・写真芸術科卒）
樋口　進	（第19期・写真芸術科卒）
山口四郎	（第20期・写真理学科卒）
指方知彦	（第21期・写真化学工業科卒）
藤沢吉範	（第21期・写真化学工業科卒）
柳沢健一郎	（第21期・写真化学工業科卒）
平塚昌三郎	（第22期・写真化学工業科卒）
橋本乳次	（第22期・写真化学工業科卒）
池知正偉	（第24期・写真工業科卒）
島田二良	（第26期・写真技術科卒）
中村修一	（第26期・写真技術科卒）
糸賀暢幸	（第27期・写真工業科卒）
木戸口　勉	（第28期・写真工業科卒）
有賀八洲雄	（第29期・写真工業科卒）
稲垣貞夫	（第30期・技術科卒）
大神達夫	（第30期・技術科卒）
大城正宏	（第30期・技術科卒）
土方英俊	（第30期・技術科卒）
山川（今井）達郎	（第30期・技術科卒）
和仁　弘	（第30期・工業科技術専攻卒）
真鍋道宏	（第30期・写真工業科卒）
真鍋（湯山）孝子	（第30期・写真工業科卒）
戸部重昭	（第31期・写真技術科卒）
関口良栄	（第32期・写真技術科卒）
西尾　元	（第32期・写真工業科卒）
笠貫　節	（第33期・写真技術科卒）
足立　伯	（第34期・写真技術科卒）
緒方省吾	（第34期・写真技術科卒）
熊木一美	（第35期・写真技術科卒）
大和昭一	（第37期・写真技術科卒）
梶原達男（達夫）	（第38期・写真技術科卒）
湯沢　伸	（第38期・写真工業科卒）
加藤　譲	（第41期・写真工業科卒）
安部繁夫	（第42期・写真技術科卒）
前野　隆	（第44期・写真技術科卒）
宮下　豪	（第44期・印刷科卒）
小林純三	（第45期・写真技術科卒）
島田　仁	（第46期・写真技術科卒）
藤沢吉彰	（第46期・写真応用科卒）
平塚千恵子	（第47期・写真応用科卒）
竝木賢二	（第48期・写真応用科卒）
田中秀典	（第50期・写真技術科卒）
副島隆康	（第50期・写真印刷科卒）
小原　雄	（第52期・写真技術科卒）
牧野（田野倉）恵	（第58期・画像技術科卒）
竹内（潮）純江	（第60期・写真技術科卒）

合計48名

編集後記

本年３月11日の東日本大震災。「今、私たちに何が出来るのか」そのような思いで、陸前高田市にて災害復興支援のボランティア活動に行ってきました。

夜行バスで東京を出発し、翌朝、災害ボランティアセンターへ入り、そこで指示を受けた広田半島方面にて、津波で押し流された瓦礫の撤去作業を行いました。日が陰る前に、予定していた活動内容を終了、再び、夜行バスにて帰路につきました。

今回の瓦礫撤去作業は、１日のみの活動で、500kmにも及ぶ被災した沿岸部の広大な地域からすれば、ほんの僅かなお手伝いしか出来ませんでした。国民の皆が力を合わせ様々な形で支援することにより、一日でも早い復興が叶う事を願わずにはいられない事を痛感しました。

広報委員　糸賀　成永（56期）

アニメーション・マンガ学科

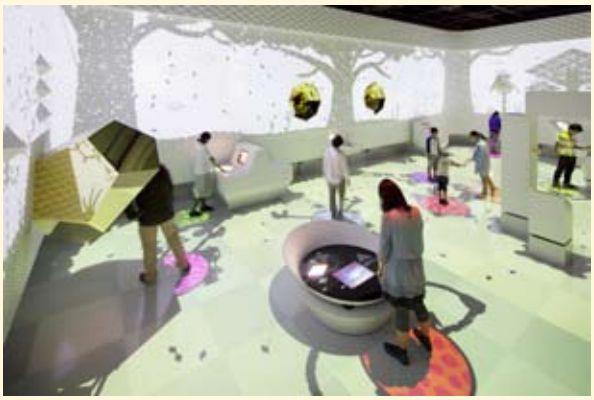
芸術学部の2000 年以降の新しい学科の活躍を紹介するページを設けました。
最初はゲーム学科（アニメーション学科ゲームコース）とマンガ学科です。

日本科学未来館常設展示「アナグラのうた ～消えた博士と残された装置～」の制作に参加

野澤邦仁さん・石塚彬人さん・鈴木司磨さん。いずれも 2011 年ゲーム学科（アニメーション学科ゲームコース）卒

空間情報科学の技術を抽象的なアプローチから体験することで、情報の意味や価値について自分なりの答えを捜す。「アナグラのうた ～消えた博士と残された装置～」は、これからの情報と社会のあり方を見つめることのできる参加型の展示です。現在、お台場の日本科学未来館にて公開中。この制作チームに、ゲームコースの第 1 期生が 3 名参加し、それぞれが専攻した分野で、その力を発揮しました。本年度、第 15 回メディア芸術祭応募作品。

写真左から野澤邦仁さん(プロジェクトマネージャー)・石塚彬人さん(ハードウェアエンジニア)・鈴木司磨さん(リードサウンドプログラマー)


空間における自分の存在自体や行動が、情報に変わっていくことを体験するのが、本展示の最大の特徴。ここでは人間は識別され、解析され、そして集積されていく。

情報と人間をつなぐのが、アナグラに残された5 つのソウチ。技術を具現化したそのカタチに触れることで、自分自身そのものが情報であり社会であることを理解する。

マンガ学科第 1 期卒業生のプロ作家としての活躍

マンガ学科が初めての卒業生を出してから数か月間に、その 1 期生が次々と雑誌で活躍し始め、喜ばしい限りです。在学中にすでにデビューを果たした学生の中から、マンガ家として成功への大きなステップである“連載”を獲得したものが 2 名も生まれました。

まずトップランナーとして、『LaLa』（白泉社）の増刊で短編を多数描いていた慎本真が、9 月発売の『黒 LaLa』という新機軸の雑誌で、いよいよ連載を開始。ベストセラー作家誉田哲也の小説をマンガ化した「アクセス」という作品で、謎の携帯電話をめぐるミステリーの世界観を十分に意識した演出が冴えわたっています（2 話以降は『LaLa DX』で連載中）。次いで、Web マガジンと新人作品のオムニバス単行本で在学中デビューしていた萩原ダイスケが、10 月から『月刊 G ファンタジー』（スクウェア・エニックス）で、やはり原作つきですが「ホリミヤ」というテンポのいい恋愛コメディ作品の連載を開始しました。

学生のデビューには面白い傾向が見られ、最初は男子が先行したのを、慎本、萩原という女子が追い抜かしていきました。しかしその後をまた男子が追いすがっています。8 月発売の『ジャンプネクスト！』（集英社）には、やはり 1 期生の佐野水涼が、2 本目の短編で独特の雰囲気を持ったギャグ作品「FINAL TAKASHI」を載せ（同誌の次の号には 4 年在学中の池田恵介のデビュー作も掲載予定）、さらに最新の快挙として、小学館の全雑誌の共同主催で行われている今年度後半の「小学館新人コミック大賞」の青年の部に、奥山ケニチが今回の最高評価で入選を果たしました。審査員評では軒並み評価が高く、短編作家として十分プロとしてやっていけるとのお墨付きを得ており、彼の作品「F コード」は近々、同社の青年マンガ誌で掲載予定です。

1 期生の彼女／彼らのますますの活躍が期待されます。